

『井関隆子日記』上巻

天保十一年八月十六日

世に入歯師として、人の落たる歯のあとに石なども作りたる歯を入れるわざあり。残りなく落たるをも、上下皆つくりて誠の歯に似せたり。一とせ己が歯のおちたる時、つくるはせたりしが、其作りざまやよからざりけん、はぐき痛かりければ、いぶせくてとり捨たりき。此ごろは殊にあしくて、くひ物いとむづかし。老たる人にもかばかりならぬはあんなるをと思へど、すべもなし。此歯の痛みて顔などはれ、苦しさにたへず、わざととり捨ぬれば、中々に心地なほりぬ。昔より是もて堅きをかみ、甘きをしりぬれば、いと大事とおもひたる物にはあなれど、はた是がためにいたうなやまさるゝに、腹だゝしうなりて、おのづから落べきをば待べくもあらず。敵などの如くにくゝて、抜捨るをおもへば、賤きものゝ子などの親にいと不孝なる、をしふれどもきかず、つねに親の心を苦しめせん方なき時勘当とて追払ふわざなすも、此なやます歯に似たり。子はもとよりいとほしう大事におもひし物なめれど、いみじく不孝なるに苦しみて、わびしうにくゝなりぬる故に、追出すなめり。大方も世にしとせの如月のころ、歯の落ける時詠る、

\*4 もえ出る春ともいはずかなしきは老その森のおちばなりけり

\*5

\*6

※以下、青字部分の翻訳は不要です。

（『井関隆子日記』上巻 原本所蔵 鹿島則幸／校注 深沢秋男 勉誠社 一九七三年、二八一頁十三行目―二八二頁十二行目）

【注】

- \*1 あんなる／あるという。あるそうだ。
- \*2 あなれど／あるというけれども。あるそうだけれども。
- \*3 そばくしき／そばそばしき。よそよそしい。
- \*4 もえ出る春／歯が抜けたのが「如月のころ」。如月（二月）は盛春なので、このように詠みだした。
- \*5 老その森／近江国の歌枕。今の滋賀県蒲生郡安土町老蘇の奥石神社の森（『歌まくら歌ことば事典』片桐洋一著 笠間書院）。「老蘇」に自らの「老い」を込める。
- \*6 おちば／落ち葉。落ち歯を掛けている。

『井関隆子日記』下巻

天保十四年十一月五日

杉嶋ノ勾<sup>\*1</sup>当来りて言<sup>い</sup>けらく、「前田夏蔭<sup>\*2</sup>が催<sup>い</sup>しにて文会<sup>い</sup>の侍<sup>い</sup>る。それ水鳥<sup>\*3</sup>といふ題<sup>い</sup>をまうけおのく物語<sup>い</sup>などかく。己<sup>おの</sup>れ文書<sup>ふみか</sup>きたどくしければ心<sup>おも</sup>に思<sup>おも</sup>ふこと<sup>い</sup>をえ言<sup>い</sup>つゞくるべくもおぼえず。然<sup>い</sup>思<sup>おも</sup>ふはかうく也、此<sup>こ</sup>おもむきもてよさまに物<sup>もの</sup>し給<sup>たま</sup>はなむ<sup>\*5</sup>」とこふ。己<sup>おの</sup>れいなみつれど目<sup>め</sup>しひ人の強<sup>しひ</sup>てい<sup>い</sup>ふが心<sup>こゝろ</sup>苦しさに、「さば心<sup>こゝろ</sup>みに物<sup>もの</sup>してむ」とて書<sup>か</sup>てつかはしたり。今<sup>いま</sup>めかしき事<sup>こと</sup>を雅<sup>みやび</sup>かにとりな<sup>と</sup>さむとするに、みじかき筆<sup>ふで</sup>あさき心<sup>こゝろ</sup>には、はかなう一枚<sup>ひとひら</sup>の文<sup>ふみ</sup>といへどもあやしう手<sup>て</sup>づくにこそあらめ。されど其<sup>その</sup>つみ己<sup>おの</sup>が身<sup>み</sup>におはぬなむうしろやすき。其<sup>その</sup>物語<sup>ものがたり</sup>は、

四<sup>\*8</sup>ツの時<sup>とき</sup>とことにはいへど此<sup>こ</sup>ごろの雲<sup>うみ</sup>のたよ<sup>た</sup>まひたゞならず、風<sup>かぜ</sup>の心<sup>こゝろ</sup>もあわたしうひまもとめつゝ入<sup>い</sup>たつに、窓<sup>まど</sup>をうつ落<sup>お</sup>葉<sup>は</sup>はしぐれの雨<sup>あめ</sup>かとうたがはれ、とりあつめたるわびしきは冬<sup>ふゆ</sup>たつ空<sup>そら</sup>の気<sup>き</sup>色<sup>いろ</sup>になむ。あるやことなき人<sup>ひと</sup>わざと静<sup>しず</sup>なるわたりをしめて

住給ふ。かの嶋\*10この好み給ふ皇子みならねど滝おとなど落しかけ池の心ひろ広う作らせ、をかしき岩  
どもあまたたてさせ、大方さまの様つきくしう見所ありてしなさせ給ひしも吹かはりつ  
る木こ枯いみじう、ふりおつる木ノ葉に水の面おもは紅葉のしがらみをかけ、みぎはの波も立  
さわげば、すさまじう思おもほしなりてたれこめがちにのみおはします。さるは御心からか  
くつれくとおはす物から所がら夕暮ゆふのあはれさ慰なぐさめかね給ひつゝたゞ頼もしき物と  
てはあけくれ手ならし給ふ火桶なりけり。かゝれば御身のうへはさら也、\*11さすが岩ほ  
の中にもあらざなれば世ノ中の有様さまなどほの聞えてくるを思ひのこし給ふ事なし。人を  
しづめ文ふみなど見つゝ埋火をかきおこし給ふに、灰がちなるははや寐よとのしわざにこ  
そと、ともし火をそむけ枕\*12を南とり給ふ。かゝりける程に青あをき狩衣かりぎぬ着たる男\*12の清気  
なるが枕まくらにより来て言いひけらく、「とく聞きこし召めしもおよばれためり己おのれはかの下総ノ国なる  
\*14某の沼に年ごろ住わたり侍るを、わりなき事出きていみじう人さわがしうなりにて  
侍り。此御前おまへなる池さばかり広からねど、人気まれにて住すみよげなれば、今よりこゝにま  
ありこむ」とて告奉つげるを、打付\*14なりと思ほすらむも心苦くるしや。とてたつほどに、更る  
夜の嵐あらしとゝもに軒にさばしるあられの音おとのはげしきに、ふと驚おどろきたまひぬ。「扱も夢に  
て有けるよ、さるにてもゆゝしきわざかな、かしこの沼には昔より\*16うしは領うしはく神ありとき  
く。そは\*17蚊ハムシとかいひてたつの類たぐひひなめるを、こゝなる池に所かへむとていま夢  
に告つげためり。さるおぞましきものと供に住わたらむ事いみじうもあべいかな。不用の池  
を掘せてからきめをもみることよ。」とすゝろにむくつけう打わなゝかれ給ひつゝ、猶

ながき夜をかこち給ふには夢うつゝわきがたう御心より見るわざなめり、一面に書たる龍のかたちして其丈はかりがたう、目もみ合せがたきが池のほとりにはひわたれば、鱗は金色の如かぢよひ、いなびかり四方にひらめきておそろしなどいはむは中くなるにあまた度おびえ給ひつゝ、さばかり寒き冬の夜に御汗もしとゝになりて、とく夜の明よかしとおぼすに、やうく鶉の声ほのきこえ、暁の鐘のおと御枕にひぢけば、いさか御心つよりてとく池の様を見むと思ほすに、寐屋のひま白うなりゆけば起出給ひ、猶おそろしきものからやをら妻戸かいはなちて見わたし給ふに、空いつしか晴て有明の月霜にさえつゝ池水にかぢやき、常見ぬ水鳥の所せきまで浮びゐて、上毛の霜を打はらひ、汀の氷打くだきつゝ鳴さわぎぬ。「あなおびたゞし。かの青き衣着たりと見つるは、此鳥のしろ変むとて夢にみえけるに社ありけめ。さるを幼くも世のことぐさをきゝわたり、わが心からおぢをのゝきける事のはかなさよ。」など独りごち給ひつゝ、

夢なりし人の袂をみづ鳥の青羽にけさはおもひあはせぬ

とばかりたゞずみ給ふに、何にかおどろきけむ鴨のはたくとむれたちぬるを御覽じ

て、

かしこしと見し夜の夢は池のおもにけさ水鳥のたつにぞ有ける

※以下、青字部分の翻訳は不要です。

『井関隆子日記』下巻 原本所蔵 鹿島則幸／校注 深沢秋男 勉誠社 一九七三年、一五六頁十行目―一五九頁九行目

【注】

\*1 勾当／盲人に与えた官名の一つ。

\*2 前田夏蔭(まえだ なつかげ)／江戸末期の儒学者・歌人。清水浜臣に国学を学ぶ。徳

川齊昭・家喜の師で『万葉集私記』などの著がある。

\* 3 水鳥といふ題／「水鳥」は河や湖などの水辺に棲んでいる鳥を総称している。『万葉集』以来詠まれる冬の叙景にかかせぬ素材。

\* 4 え言つゞくるべくもおぼえず／「えうず」でできないという不可能を表す。

\* 5 なむ／他への願望を表す助動詞。

\* 6 みじかき筆あさき心／筆力が十分でないことをこのように表現した。隆子が謙遜している。

\* 7 其物語は／ここからは、杉嶋ノ勾当の述べたことを隆子が忖度して物語を創作した文章となっている。

\* 8 四ツの時／春夏秋冬の四季。

\* 9 わざと／とりわけ

\* 10 嶋好み給ふ皇子／『伊勢物語』七十八段に「島好み給ふ君」とあり、それを前提とする。「山科の禅師の親王（＝人康親王とするのが通説）」が島（＝庭園）を好む人であったとされ、日記本文の以下の記述も、同じ『伊勢物語』七十八段の「その山科の宮に、滝落とし、水走らせなどして、おもしろくつくられたるに」とあるのに基づく。

\* 11 さすが岩ほの中にもあらざなれば世ノ中の有様などほの聞えてくる／『古今集』雑九五二「いかならむ巖の中にすまばかは世のうき事のきこえござらむ」（題知らず、読人しらず）を踏まえている。

\* 12 枕を南とり給ふ／「南」は係助詞「なん」を漢字表記したもの。

\* 13 男の清気なるが／男のきよげなるが（漢語の「清気」ではなく「きよげ」）。

\* 14 某の沼／この文章は、天保の改革の印旛沼開拓工事のことを扱っているのですが、この沼は印旛沼を指す。開拓工事は享保九年、天明五年に行われいずれも失敗し、水野忠邦はこの年に三回目の工事に着手したが、忠邦の老中罷免と共に中止された。

\* 15 打付なりと思ほすらむも心苦しや／突然のこととふしついで失礼なことだと思ひますのも、気がとがめることですよ。源氏物語橋姫に「うちつけなるさまにやと、あいなくとどめ侍りて残り多かるも心苦しきわざになむ」とあるのを踏まえていると思われる。

\* 16 領く神／支配している神。この沼には、奇怪な龍が住んでいたとされる。

\* 17 蛟（ミヅチ）／日本書紀などでは「大虬」と表記され「ミヅチ」と訓ぜられる。本文では続いて「たつ（龍）の類ひ」としている。

\* 18 夢にみえけるに社ありけめ／「社」は助動詞「こそ」の漢字表記。

\* 19 人の袂をみづ鳥の青羽にけさはおもひあはせぬ／「人の袂をみづ鳥」は、「水鳥」と袂を「見ず」との掛詞。袂の色が青色だったことを見ていなかったが、今朝、水鳥の羽の青色をみて、夢で見た人は、水鳥の化身であったかと思ひ合わされた。袂の縁で「あわせ」も使用された可能性もある。

\*20 水鳥のたつにぞ有ける／「水鳥の」たつに「龍」(沼の神とされる「たつの類ひ」)  
を掛けている可能性もある。

【参考文献】

昭和女子大学光葉博物館編集『徳川將軍家を訪ねてー江戸から令和へ』昭和女子大学光葉博  
物館、2020年

ドナルド・キーン著 金関久夫訳「井関隆子日記」『百代の過客ー日記にみる日本人』講談  
社文庫、2011年

Donald Keene 著 「The Diary of Iseki Takako」 *Travelers of a Hundred Ages: The Japanese as  
Revealed through 1,000 Years of Diaries*, Henry Holt and Company, 1989

深沢秋男著 『水鳥』 『井関隆子の研究』 和泉書院、2004年、頁91～103

深沢秋男著 『旗本夫人が見た江戸のたそがれ 井関隆子のエスプリ日記』文春新書文藝春秋、  
2007年